

# 地域学部 に在籍する学生における障がい者に対する意識・理解

浦木陽子\*・寺川志奈子\*\*

## Consideration and Understanding in Student Who is on the Faculty of Regional Sciences for Persons with Disabilities

URAKI Yoko, TERAKAWA Shinako

キーワード：障がい観，障がい理解，接触経験，知識

Key Words：Outlook on Disability, Understanding Disability, Contact Experience, Knowledge

### I. 問題と目的

『障害者基本計画』(2002)によると、障がい者の社会参加に向けて「障害者の活動を制限し、社会への参加を制約している諸要因を除去するとともに障害者が自らの能力を最大限発揮し自己実現できるよう支援することが求められる。」として様々な施策がなされている。その中で「社会のバリアフリー化の推進」において「建物、移動、情報、制度、慣行、心理などソフト、ハード両面にわたる社会のバリアフリー化を強力に推進する。」と、物的環境だけでなく、同じ地域の中で暮らす人々の協力や理解といった人的環境の必要性も示されている。

しかし、内閣府の『障害者に関する世論調査』(2007)によると、障がいを理由とする差別や偏見があると感じている者の割合が82.9%と、大半の者が偏見・差別の存在を感じており障がい者に対する壁は根強いように感じられる。このことから、人的環境を整えるためには偏見や差別の解消が重要な課題であり、そのために、障がいや障がい者に対する意識に影響を与える要因を調べるのが大切になってくると考えられる。そこで、障がいや障がい者に対する意識と要因の関係を調べ、どの要因がより好意的な態度へと繋がっているのかを明らかにすることで、偏見や差別の解消や障がい理解へと繋げていきたい。

先行研究によると、生川ら(2001)の知的障がい者に対する大学生の態度研究や、中村(1979)の知的障がい児に対する非好意的態度の因子を取り出す研究において、福祉や教育の分野を専攻している群は障がい者への態度が肯定的で受容傾向にあることが明らかになった。しかし、これらの態度は大学で経験を積む中で形成されていったものとも考えられるし、それ以前に形成されて肯定的な印象を持った人が集まっているために現れた態度とも考えられた。

そこで、大学での経験が障がい者への態度にどう影響するかを検討するために、大学での専門的な知識の取得や接触経験による比較を行う必要があると思われる。

また、接触経験や知識・情報と障がい者に対する態度との関係について、接触経験に関しては生

---

\*琴浦町立安田小学校

\*\*鳥取大学地域学部地域教育学科

川ら(1992)が、福祉保育教育系の女子大生を対象としてボランティアによる接触経験の有無が知的障がい者に対する態度にどう関係してくるかを検討している。ボランティア経験のある群は接触経験のない群よりも好意的であったことが示されている。このことから、接触や知識・情報と障がい者に対する態度の関係として、接触経験の内容に関しては、ボランティアといった協同接触が、障がい者への好意的・前向きな態度へ大きな影響を及ぼすことがいえると思われる。しかし、接触場面に関してはボランティアでの接触が接触経験のない場合よりも好意的な態度に向かいやすいことは明らかになったものの、接触経験のある群の中での場面による差異はみえず、どのような場面での接触経験がより障がい者への好意的な態度につながるのかは明らかになっていない。そのため、枠組みを変えることによって変化が現れる可能性があることが考えられた。「ボランティア」というものが自発的なものと受け身な接触である体験的なものと2通りあるため、ボランティア経験を回答者の意識の差で分けることで現れる結果が違ってくる事が考えられる。

知識・情報に関しては研究自体が少なく、知識・情報の取得場面に関する研究は見当たらなかった。また、内容に関して分析が行われているものの、内容同士の比較は行われていないためどのような内容が障がい者に対する態度に大きな影響を与えるのかは明らかになっていないようであった。

加えて、山内(1996)の研究によると接触経験の方が知識・情報の取得経験よりも障がい者への態度に与える影響が大きかったが、異なる知識・情報が与えられれば影響の大きさにも変化が現れる可能性がある。そのため、異なる枠組みの中でも接触の影響の方が大きいのかを検討してみる必要があると考えられた。

以上のことから、本研究では地域学部生の障がい観を明らかにするとともに、それに影響を与える要因について大学での経験(実習、講義)や、接触経験や知識・情報の取得経験との関係の検討を行っていく。接触経験や知識・情報の取得経験に関しては、各経験の取得場面による差異や両者の影響の比較を行い、知識・情報に関してはその内容による比較も行うこととした。また、接触経験や知識・情報は取得量が増えていくことで意識に変化が起こる可能性もある。そのため、各経験の取得量の比較も行うこととする。

## II. 方法

### 1. 対象

鳥取大学地域学部の4学科(地域環境, 地域教育, 地域文化, 地域政策)の1~3年生を対象とした。

回収率は地域環境学科が90.3% (130/144人), 地域教育学科が90.0% (144/160人), 地域政策学科が85.6% (119/139人), 地域文化学科が89.1% (123/138人)であった。

### 2. 期間

2010年10月12日~2010年10月26日

### 3. 手続き

質問紙調査法によって各学科, 各学年の講義中に配布し, 一斉に回答を求めた。

回答時間は15分程度であった。

### 4. 調査項目

調査項目は12項目設け, 所属を問う2項目, 障がい観を問う1項目(小項目22個), 接触経験を問う1項目(小項目3個), 知識・情報を問う1項目(小項目3個), 大学での実習経験・講義の受講状況を問う2項目, 地域と障がい者・自分と障がい者を問う4項目, 主観的な障がい観への影響に関する1項目とした。

障がい観を問う項目に関しては、石川ら(2009)の論文に基づき作成し、小項目を22個立てた。その際、「障害」の表記をすべて「障がい」とし、項目1・2・8・14・16については、表現の明確化を図るため、文脈の意味が変わらないように配慮しながら表記の変更・付け加えを行った。回答方法は、石川ら(2009)の論文同様、「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまりそう思わない」「全く思わない」の5件法とした。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 障がい観

障がい観について尋ねた22項目について、地域学部生の障がい者に対する意識を探るために主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った(「とてもそう思う」から順に、1~5点とした)。因子分析の過程で固有値1以上の因子が18個検出された。この中から固有値の変化が大きかった3個の因子に絞り、因子負荷量の低かった小項目14・17、複数の因子に反映していた小項目16ははずして分析を行った。最終的に19項目に対し、3個の因子が抽出された(表1)。

表1 障がい者に対する地域学部生の意識

	第1因子 抵抗なし	第2因子 低位のポジティブ 感情	第3因子 社会との良好 な関係	共通性
22. 関わり方が分からない	<b>.500</b>	.018	.208	0.294
13. 偏見を感じる	<b>.600</b>	-.134	.266	0.449
15. 怖い	<b>.631</b>	.027	.004	0.399
18. 抵抗を感じる	<b>.688</b>	-.126	.191	0.526
21. 見ないふりをしたい	<b>.730</b>	-.111	.045	0.547
20. 避けたい	<b>.805</b>	-.203	.087	0.696
6. 好きなものに集中できる	-.014	<b>.550</b>	-.146	0.325
4. 意志の強い	-.153	<b>.618</b>	.022	0.406
7. 生きるパワーを与える	-.065	<b>.623</b>	-.093	0.401
12. 純粹	-.109	<b>.674</b>	.046	0.468
9. 努力家	-.021	<b>.752</b>	.127	0.583
2. 明るい	-.069	.216	<b>-.396</b>	0.208
8. 邪魔なもの	.345	-.172	<b>.381</b>	0.294
10. 時間がかかる	.155	.162	<b>.388</b>	0.201
1. 重い	.334	.001	<b>.503</b>	0.365
11. 壁が多い	.023	.121	<b>.559</b>	0.327
3. 不便そう	.121	-.152	<b>.746</b>	0.594
5. 大変そう	.101	-.071	<b>.769</b>	0.607
因子寄与	3.093	2.445	2.427	7.965
因子寄与率	16.277	12.868	12.771	41.916
累積寄与率	16.277	29.144	41.915	

(因子抽出法：主因子法, バリマックス回転)

第1因子は、項目13「障がい児・者に差別や偏見を感じてしまう。」、項目15「障がい児・者に対して怖いと感じる。」、項目18「障がい児・者に抵抗を感じる。」、項目20「障がい児・者を避けたい。」、項目21「障がい児・者と偶然に出会ったら、みないふりをしてしまいたい。」、項目22「障がい児・者にどう関わっていいかわからないと思う。」の6項目からなった。これらは障がい者に対する抵抗感を表す項目であり、抵抗感のない方に高い値を示したことから、第1因子は「抵抗なし」とした。

第2因子は、項目4「障がいがある人は自分の意志を強く持っている。」、項目6「障がいがあることでかえって好きなものに集中できる。」、項目7「障がいは生きるパワーを与えてくれる。」、項目9「障がいを持つ人は努力家だががんばり屋である。」、項目12「障がいのある人はきれいで・純粋なところがある。」の5項目からなった。これらは障がい者に対するポジティブな印象に関する項目であり、ポジティブな印象を持たない方に高い値が出た。そのため、第2因子は「低位のポジティブ感情」とした。

第3因子は、項目1「『障がい』ということばにマイナスあるいは重いイメージを感じる。」、項目2「『障がい』ということばにプラスあるいは明るいイメージを感じる。」、項目3「障がいがあると、生活するのに不便そうである。」、項目5「障がいがあると、生活するのに大変そうである。」、項目8「『障がい』は邪魔なものというイメージがある。」、項目10「障がいがあると何事にも時間がかかる。」、項目11「障がいがあると乗り越えなければならない壁が多い。」の7項目からなった。これらは「障がい」という言葉に対するイメージや、障がいがあることが社会生活に与える影響を客観的にみた時のイメージを表す項目である。この7項目に対し、「障がい」という言葉にネガティブな印象を持っていない、障がいがあることが社会生活を送るうえでの困難さをもたらさない方に高い値を示した。以上の結果は、障がいがあることが社会で不利になる状況を作りだしているのではないと考えていることを表すものと推測できるため、第3因子は「社会との良好な関係」とした。

この3つの因子から、さまざまな条件によって障がい観に変化が現れるかどうかをみるために、因子得点を用いて分析を行った。

## 2. 各因子と大学での経験との関係

大学での経験について、介護等体験や特別支援学校への実習による障がい者との接触経験、特別支援教育に関する講義の受講による知識・情報の取得経験の2つの経験を尋ね、それぞれが障がい観に与える影響を調べた。

### (1) 介護等体験・特別支援学校への実習経験

介護等体験・特別支援学校への実習経験のある者は19.3%、ない者は80.7%であった。

実習経験の有無と各因子と大学での実習経験の有無の関係について比較を行った(表2)。

平均値は、実習経験のある群は第1・3因子において正の方向に傾き、第2因子は負の方向に傾いた。実習経験のない群はすべて実習経験のある群と反対の方向に値が傾いた。t検定によると、1・3因子は5%水準で有意差が出たが、第2因子は有意差はみられなかった。

実習経験のある群は、実習経験のない群に比べて抵抗感がなく、社会との良好な関係を築いていると考えているという結果となった。

表2 各因子と介護等体験・特別支援学校への実習経験の有無との関係

因子	実習経験の有無	度数	平均値	標準偏差	t 値	自由度	有意確率
第1因子 抵抗なし	あり	96	0.204	1.018	2.38	499	p<.05
	なし	405	-0.043	0.889			
第2因子 低位のポジティブ感情	あり	96	-0.039	0.937	0.49	499	
	なし	405	0.012	0.890			
第3因子 社会との良好な関係	あり	96	0.213	0.864	2.58	499	p<.05
	なし	405	-0.046	0.889			

## ②大学での特別支援教育に関する講義の受講

大学での障がいに関する講義（地域教育学科で開講されている。）の受講者は、受講者115人中地域教育学科が109人（94.8%）と、大半が地域教育学科であった。他6人は地域政策学科55人、地域文化学科1人で、その内地域政策学科5人は皆「その他」を選択していた（「その他」の記述のあったものは、全て講義の一部で取り上げられたものであった。）。

各因子と大学での講義受講者に関して、学年ごとの受講可能数を参考に、受講していない群、受講数が1～2個の群、3～8個の群、9個以上の群に分けて比較を行った（表3、図1）。

表3 各因子と受講数ごとの講義受講者との関係

因子	受講数	度数	平均値	標準偏差	分散分析	多重比較 Tukey HSD p<.05
第1因子 抵抗なし	なし	393	-0.109	0.898	F (3,500) =9.89 p<.01	なし<1～2, なし<9以上
	1～2	48	0.415	0.927		
	3～8	42	0.215	0.775		
	9以上	21	0.655	0.928		
第2因子 低位のポジティブ感情	なし	393	0.119	0.872	F (3,500) =11.09 p<.01	なし>1～2, なし>3～8, なし>9以上
	1～2	48	-0.421	0.924		
	3～8	42	-0.385	0.805		
	9以上	21	-0.491	0.801		
第3因子 社会との良好な関係	なし	393	-0.066	0.920	F (3,500) =5.76 p<.01	なし<3～8, 1～2<3～8
	1～2	48	-0.020	0.781		
	3～8	42	0.466	0.669		
	9以上	21	0.357	0.727		

分散分析・多重比較による分析を行ったところ、第3因子のみ受講数による意識の差がみられた。第3因子は、平均値は受講数が3～8個、9個以上の群は正の方向に、受講していない群、受講数1～2個の群は負の方向に傾いた。分散分析の結果1%で有意差がみられ、多重比較によると第3因子の意識は、受講数3～8個の群が受講数1～2個の群よりも有意に高かった。

よって、大学での講義受講者との関係において、受講数が3～8個の群は1～2個の群に比べて社会との良好な関係を築いていると考えていることが明らかになった。

講義受講者は地域教育学科が大半を占めているため、受講していない群と講義受講者で有意差が

出たのは所属との関係による結果だとも考えられた。しかし、第3因子に関しては講義受講者の中で有意差がみられたので、講義数の増加によって意識が高まったといえる。

### 3. 各因子と接触経験、知識・情報取得経験との関係

#### (1)接触経験

接触経験のあった群に接触場面について尋ねた。以下(表4-1, 4-2)はその内訳である。

表4-1 接触場面の内訳 (人数) (複数回答あり)

カテゴリー	家庭周辺			学校				自発的接触		その他
	家庭	親戚	近所	自分のクラス	自分の学校の特別支援学級	交流学习	ボランティア体験学習	自発的なボランティア	サークル	
総計	25	43	71	191	199	119	59	72	31	60

表4-2 その他の内訳 (人数) (複数回答あり)

カテゴリー	家庭周辺		学校		自発的接触			偶発的接触			記載なし	
	知人を介した接触	友人	学校	問3以外の実習	学童	イベント	習い事	アルバイト	公共交通機関	病院		道端
総計	5	2	10	4	3	4	3	17	3	2	2	6

これらの内訳を「家庭周辺」「学校」「自発的接触」「偶発的接触」の4つのカテゴリーに分けた。「家庭周辺」は接触機会が変化しづらいものと考え、家庭、親戚、近所、その他の友人・知人を介した接触を加えた。「学校」は、学校という空間の中の接触や学校で意図的に計画された接触であるため、自分のクラス、自分の学校の特別支援学級、交流学习、ボランティア体験学習、その他の学校(この学校とは、同じ学校の異学年との接触などである)、特別支援学校への実習・介護等体験以外の実習を加えた。「自発的接触」は回答者が自発的に接触を求めている場面であるので、自発的なボランティア、サークル、その他の学童、イベント、習い事を加えた。「偶発的接触」は回答者も接触相手も意図しない接触であるため、アルバイト、公共交通機関、病院、道端を加えた。

カテゴリー化した4つの接触場所「家庭周辺」「学校」「自発的接触」「偶発的接触」を用いて各因子との比較を行った。

まず、接触場面の多様さによって意識に変化が生じるかをみるために、複数のカテゴリーでの接触のある群、1つの接触場面での経験のみの群、接触経験のない群に分けた(表5)。

第1因子・第3因子の平均値は、複数の接触場面での経験のある群が正の方向に、1つの場面での接触がある群・接触経験のない群が負の方向に傾いた。分散分析の結果、第1因子は1%水準、第3因子は5%水準で有意差がみられ、多重比較によると、第1因子・第3因子共に、意識は複数の経験のある群が単一の接触または接触経験のない群よりも高かった。第2因子は有意差はみとめられなかった。

接触場面の数において、複数の接触場面での経験を積んでいる群が1つの場面での接触のみの群・接触のない群よりも、障がい者に対する抵抗感がなく社会とも良好な関係を築けていると考える傾向にあることが明らかになった。

表5 各因子と接触場面の量との関係

因子	接触場面の数	度数	平均値	標準偏差	分散分析	多重比較 Tukey HSD p<.05
第1因子 抵抗なし	複数	160	0.204	0.951	F (2, 501) =6.50 p<.01	複数>1つ, 複数>接触なし
	1つ	266	-0.066	0.900		
	接触なし	78	-0.194	0.836		
第2因子 低位のポジティブ感情	複数	160	-0.064	0.944	F (2, 501) =0.59 ns	
	1つ	266	0.027	0.831		
	接触なし	78	0.038	1.003		
第3因子 社会との良好な関係	複数	160	0.159	0.961	F (2, 501) =3.95 p<.05	複数>1つ, 複数>接触なし
	1つ	266	-0.056	0.853		
	接触なし	78	-0.135	0.861		

続いて、接触場面に向かう回答者の態度による比較を行った。4つのカテゴリーの中で、回答者が積極的に接触を求めているものは「自発的接触」であり、その他のものは回答者の意図した接触ではない。そのため、接触態度による違いを探るために、回答者側の意図的な接触願望のある群と意図しない接触の群、接触経験のない群で各因子との関係を調べた（表6、図1）。

表6 各因子と接触の態度との関係

因子	接触の態度	度数	平均値	標準偏差	分散分析	多重比較 Tukey HSD p<.05
第1因子 抵抗なし	意図した接触	97	0.208	0.875	F (2, 501) =4.32 p<.05	意図した接触> 意図しない接触, 意図した接触> 接触なし
	意図しない接触	329	-0.015	0.938		
	接触なし	78	-0.194	0.836		
第2因子 低位の ポジティブ感情	意図した接触	97	-0.319	0.932	F (2, 501) =7.90 p<.01	意図した接触< 意図しない接触, 意図した接触< 接触なし
	意図しない接触	329	0.085	0.837		
	接触なし	78	0.038	1.003		
第3因子 社会との良好な関係	意図した接触	97	0.159	0.885	F (2, 501) =2.46 p<.10	
	意図しない接触	329	-0.015	0.902		
	接触なし	78	-0.135	0.861		

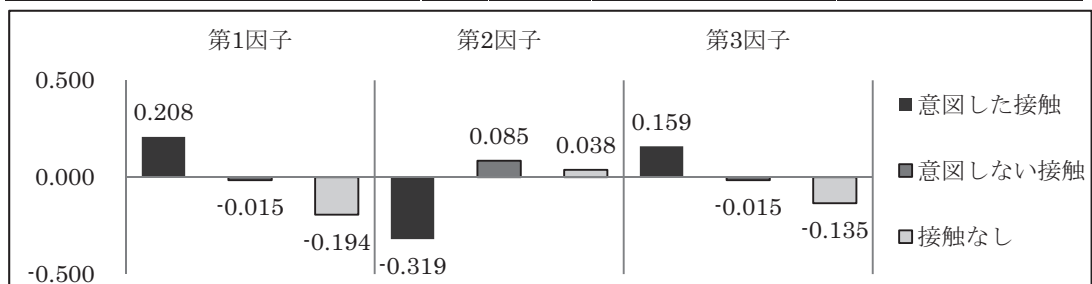


図1 各因子の接触の態度ごとの平均値

第1因子の平均値は、意図的な接触のある群が正の方向に、他の2群は負の方向に傾いた。分散分析の結果5%水準で有意差がみられ、多重比較によると第1因子の意識は意図した接触群が他の2群よりも有意に高かった。第2因子の平均値は、意図しない接触群・接触のない群が正の方向に、意図した接触群が負の方向に傾いた。分散分析の結果1%水準で有意差がみられ、多重比較によると第2因子の意識は意図しない接触群・接触のない群が意図した接触群よりも有意に高かった。第3因子は10%水準で有意傾向がみられた。

接触場面に向かう態度において、意図して接触場面に向かっている群は意図せず接触を行っている群よりも抵抗感がなく、高位のポジティブ感情を持っていることが明らかになった。

## (2)知識・情報の取得経験

知識・情報の取得についても、取得経験のあった群に取得場所を尋ねた(表7)。

表7 知識・情報の取得場所内訳(人数)(複数回答あり)

カテゴリー	メディア					学校	その他
	テレビ	映画	新聞	本・漫画	インターネット		
取得場所						学校	その他
総計	252	71	61	117	45	378	19

まず、取得場面の数と各因子との比較を行った。知識・情報の取得場所について「メディア」「学校」の2つにカテゴリー化した。「メディア」はメディアを通じた自主的な知識・情報の取得と考え、テレビ・映画・新聞・本(・漫画)・インターネットを加えた。

この2つの場面をもとに、まず取得経験のある群、どちらか一方の取得経験がある群、両方の取得経験がない群に分けて比較を行った(表8)。

表8 各因子と知識・情報の取得場面の量との関係

因子	取得場面の量	度数	平均値	標準偏差	分散分析	多重比較 Tukey HSD p<.05
第1因子 抵抗なし	2つ	222	0.048	0.877	F(2, 501) =2.36 p<.10	
	1つ	201	0.029	0.972		
	取得なし	81	-0.202	0.868		
第2因子 低位のポジティブ感情	2つ	222	-0.132	0.912	F(2, 501) =9.90 p<.01	2つ<取得なし, 1つ<取得なし
	1つ	201	-0.007	0.850		
	取得なし	81	0.378	0.863		
第3因子 社会との良好な関係	2つ	222	0.037	0.958	F(2, 501) =0.90 ns	
	1つ	201	0.007	0.808		
	取得なし	81	-0.119	0.922		

第1因子は、分散分析の結果10%水準で有意傾向がみられた。第2因子は、平均値は取得のない群が正の値に傾き、複数・単一の場所による取得のあった群はそれぞれ負の値に傾いた。分散分析の結果1%水準で有意差がみられ、多重比較によると第2因子の意識は取得のない群が複数・単一の場所による取得経験のあった群よりも高かった。第3因子は有意差はみられなかった。

知識・情報の取得場面の数に関して、取得経験のある群はなし群よりも高位のポジティブ感情を持っているが、取得場面の数による意識の差はみられないことが明らかになった。

次に、取得場所に向かう回答者の態度に関する比較を行った。回答者の自発的な取得である「メ



ディア」での取得経験のある群，与えられた取得である「学校」での取得経験のある群，取得のない群に分けて，知識・情報取得の態度による意識の変化を探ることとした（表9，図2）。

表9 各因子と知識・情報取得の態度との関係

因子	取得の態度	度数	平均値	標準偏差	分散分析	多重比較 Tukey HSD p<.05
第1因子 抵抗なし	自発的	275	-0.010	0.875	F (2, 501) = 3.45 p<.05	与えられたもの> 取得なし
	与えられたもの	148	0.129	1.001		
	取得なし	81	-0.202	0.868		
第2因子 低位の ポジティブ感情	自発的	275	-0.121	0.894	F (2, 501) =10.02 p<.01	自発的<取得なし， 与えられたもの< 取得なし
	与えられたもの	148	0.017	0.862		
	取得なし	81	0.378	0.863		
第3因子 社会との良好な 関係	自発的	275	0.010	0.940	F (2, 501) =0.92 ns	
	与えられたもの	148	0.046	0.787		
	取得なし	81	-0.119	0.922		

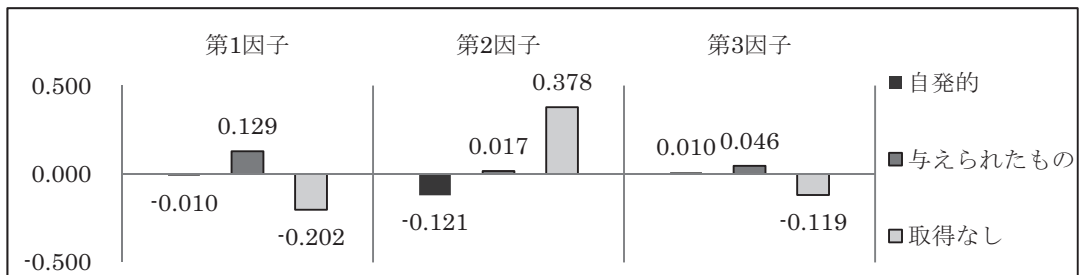


図2 各因子の知識・情報取得の態度ごとの平均値

第1因子の平均値は，与えられたものの群については正の方向に，自発的な取得の群・取得のない群は負の方向に傾いた。分散分析の結果5%水準で有意差がみられ，多重比較によると第1因子の意識は，与えられたものの群が取得のない群よりも有意に高かった。第2因子の平均値は，与えられたものの群・取得のない群は正の方向に，自発的な取得の群は負の方向に傾いた。分散分析の結果1%水準で有意差がみられ，多重比較によると第2因子の意識は取得のない群が自発的な取得の群・与えられたものの群よりも有意に高かった。第3因子は有意差はみられなかった。

知識・情報の取得場面に向かう態度において，与えられた知識・情報のみの取得経験を有する群は取得経験のない群より抵抗感がなく，態度に関係なく取得経験を有する群は取得経験のない群より高位のポジティブ感情を持っていることがわかった。

知識・情報の取得場所に続いて，その内容について複数回答で尋ねた(表10)。

表10 知識・情報の内容の内訳 (人) (複数回答あり)

カテゴリー	個人的情報提示		一般的情報提示		事件	その他
	ドキュメント	ドラマ	特性	支援方法	事件	
総計	278	162	255	207	39	12

知識・情報の内容を「個人的情報提示」「一般的情報提示」「事件」の3つにカテゴリー化した。「個人的情報提示」はドキュメント・ドラマ，「一般的情報提示」は特性・支援方法とした。

この3つの取得内容から、取得率が60.5%・58.5%と同程度の取得率であった「個人的情報提示」・「一般的情報提示」の2つを用いて比較を行った。この2つの内容を併有している群、「個人的情報提示」のみの群、「一般的情報提示」のみの群、両者の内容の取得経験のなかった群に分け、知識・情報の取得内容によって意識の変化が現れるのかを探ることとした(表11, 図3)。

表11 各因子と知識・情報の取得内容との関係

因子	相互関係	度数	平均値	標準偏差	分散分析	多重比較 Tukey HSD p<.05
第1因子 抵抗なし	併有	186	0.169	0.930	F (3,500) =4.32 p<.01	併有> 個人的情報提示のみ, 併有>両方なし
	個人的情報提示のみ	118	-0.110	0.879		
	一般的情報提示のみ	109	0.007	0.916		
	両方なし	91	-0.210	0.884		
第2因子 低位のポジティブ感情	併有	186	-0.032	0.919	F (3,500) =1.90 ns	
	個人的情報提示のみ	118	0.100	0.846		
	一般的情報提示のみ	109	-0.142	0.891		
	両方なし	91	0.106	0.897		
第3因子 社会との良好な関係	併有	186	0.035	0.902	F (3,500) =4.72 p<.01	個人的情報提示のみ< 一般的情報提示のみ, 一般的情報提示のみ> 両方なし
	個人的情報提示のみ	118	-0.123	0.821		
	一般的情報提示のみ	109	0.232	0.969		
	両方なし	91	-0.190	0.818		

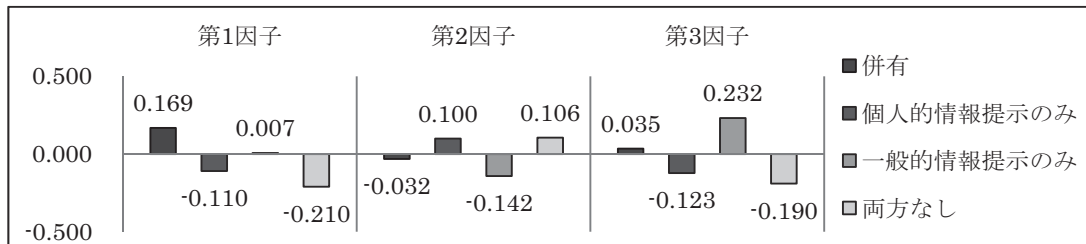


図3 各因子の知識・情報の取得内容ごとの平均値

第1因子・第3因子の平均値は、2つのカテゴリーを併有している群・「一般的情報提示」のみの群が正の方向に、「個人的情報提示」のみの群・両者の取得のない群が負の方向に傾いた。分散分析の結果、両方の因子に1%水準で有意差がみられ、多重比較によると、第1因子は併有している群が「個人的情報提示」のみの群・両者の取得のない群よりも、第3因子は「一般的情報提示」のみの群が「個人的情報提示」のみの群・両者の取得のない群よりも有意に高かった。第2因子は分散分析の結果有意差はみられなかった。

知識・情報の取得内容に関して、「個人的情報提示」「一般的情報提示」両方の取得経験のある群は、「個人的情報提示」のみ・両者の取得経験のない群よりも障がい者に対する抵抗感がなく、「一般的情報提示」の取得経験のある群は「個人的情報提示」のみ・両者の取得経験のない群よりも社会との良好な関係を築けていると感じていることが明らかになった。

#### IV.総合的考察と今後の課題

障がい観を尋ねた項目に関し因子分析を行った結果、「抵抗なし」「低位のポジティブ感情」「社会との良好な関係」の3つの因子が抽出された。この3つの因子について、因子得点を用いて様々な条件との比較を行った。

##### (1)各因子と実習・講義との関係

各因子と実習・講義との関係について、実習に関しては、介護等体験や特別支援学校への実習のある群がない群に比べて障がい者に対する抵抗感がなく、社会とも良好な関係を築けていると感じていることが明らかになった。これは実習という今までよりも積極的に関わる経験によって既存のイメージの転換が起きた者が増加したことが有意差の生まれた理由だと考えられる。それは、主観的な障がい観についての自由記述で、「介護等体験で喋ってみたら共通の話もたくさんあって楽しかった。」といった意見がみられたことから窺える。よって、実習経験が、特に関心の薄かった群における抵抗感や社会との壁の払拭に影響を及ぼしていることが考えられた。

講義の受講に関しては、講義受講数が3～8個の群が1～2個の群に比べて障がい者と社会とが良好な関係を築けていると感じていることが明らかになった。そのため、大学での学びが増えることで障がい者と社会との壁の払拭の意識は高まっていくことが示された。講義受講者間での有意差の出なかった2因子については、講義受講者全体の傾向として好意的な方向へと値を示したことから、専攻が大きく影響していることが考えられた。

以上のことから、大学での経験は障がい観の変容に影響を及ぼすことが明らかになった。

##### (2)各因子と接触経験、知識・情報取得との関係

各因子と接触経験、知識・情報取得との関係において、接触経験、知識・情報の内容について、それぞれの経験場面の量、経験場面にむかう回答者の態度で比較を行ったが、それぞれの経験の場面の量に関して、接触経験は、様々な場面で障がい者と接する経験を積むことが1つの場面での経験のみの場合や経験のない場合よりも抵抗感の払拭に繋がることが明らかになった。知識・情報取得に関しては、量に関係なくメディアや学校教育を通して取得経験のある群が取得経験のない群よりもポジティブな感情を持っていることが明らかになった。

経験の場面向かう態度に関しては、接触経験は、自発的に接触場面向かっている群が接触経験はあっても自発的な経験のない群や接触経験のない群よりも、また、知識・情報取得は、取得場面向かう積極性に左右されず取得経験のある群が取得経験のない群よりも障がい者への抵抗感は少なく、ポジティブな感情を持っていることが明らかになった。

この結果により、接触経験は量や接触場所に向かう態度の違いが障がい観に影響していたものの、知識・情報は量や態度の違いによる影響はみられなかったことが示された。これは、知識・情報が、メディアから得る内容も学校で得る内容も、抵抗感やポジティブな感情に影響を与えるものとして差が無いこと、また、自発的に知識・情報を求めようとした時に、接触を求める時よりもその経験を入手しやすく簡単に取得できるため、両者の経験に向かう意識に差が起きづらいことによるものだと考えられる。

また、意識の差がみられたものの平均値を接触経験と知識・情報取得とで比べてみると、接触経験については複数の場面での接触や自発的に接触場面向かっている群の平均値が好意的な方向に大きく伸びているが、知識・情報取得については、取得経験のある群の平均値は接触経験のような大きな値は出ず、取得経験のない群の平均値が好意的でない方に大きく伸びていた。そのため、知識・情報取得における意識の差は取得経験がない群の値による影響が大きいと思われる。これは、

協同による接触経験の方が情報提示よりも好意的な態度への変容が起りやすとした山内(1996)の結果に類似している。山内(1996)は、情報提示は一方的にポジティブな知識が与えられるものであるために、それまでの枠組みと新たな情報のずれを見直す動きである「ゆれ」を経験するまもなく、別な枠組みを用いて情報を理解するとしている。本研究は経験の場面による比較であるため比較の枠組みは異なる。接触経験に関する自由記述をみても、両方向からの接触が多いものの協同によらない接触の記述も多くみられた。このことから、枠組みが違うものの山内(1996)の研究が支持されたと考えられ、好意的な障がい観を形成するには接触経験の影響の方が大きくはたらくということが示された。

知識・情報の内容に関しては、「個人的情報提示」「一般的情報提示」の両方の内容を取得している群が「個人的情報提示」のみ取得の群や両方の取得経験のない群よりも障がい者に対する抵抗感が少ないこと、「一般的情報提示」のみ取得の群が「個人的情報提示」のみ取得の群や両方の取得経験のない群よりも社会との良好な関係を築いていけると考えていることが明らかになった。

この結果から、「個人的情報提示」のみでは好意的な意識に繋がりにくいことが示された。「一般的情報提示」は特性や支援方法などに関する内容であるために、この内容を取得することで回答者が障がい者との接触を意識したり想定していることが考えられるが、「個人的情報提示」は個人の一事例を取り挙げたもので1つの物語として捉え、知識・情報を得て終わりという状態になっていることが考えられる。そのために、障がい者全体への意識まで繋がらないということが想定された。

以上、本研究では地域学部生の障がい者との接触経験や知識・情報取得の実態把握を元に、障がい観に影響を与える要因や地域と障がい者や自分と障がい者の距離感を探っていった。その結果、多くの場面で接触経験を多く積むことや接触に向かう積極性が好意的な態度に繋がることが示された。また、知識・情報は個人的情報提示だけでは好意的な態度に繋がりにくいことも示された。

しかし、経験の取得時期について分化できていないために、どの時期に接触や知識・情報を得たことが障がい者への意識に影響を与えているのかは分からなかった。経験の時期による分析も行うことで、どの時期に与えられた経験が障がい理解に有効的にはたらくことを探っていく必要もあることが考えられた。

また、今回は様々な経験の回答を求めたために障がい種を定めず、障がい者一般として調査を行ったが、障がい種によって意識に差が現れる可能性もある。そのため、ある障がいに限定して分析を行う必要もあると思われる。

## 文献

- 中村勝 (1979) 精神薄弱児に対する態度の因子分析. 愛媛大学教養部紀要, 第11巻, 25-40.
- 生川善雄・安河内幹 (1992) 精神薄弱児 (者) に対する態度と接触経験・ボランティア経験との関係に関する研究—福祉保育教育系女子大生の場合—. 発達障害研究, 13 (4), 102-109.
- 山内隆久 (1996) 偏見解消の心理—対人接触による障害者の理解—. ナカニシヤ出版.
- 生川 善雄・那須 理絵 (2001) 知的障害者に対する大学生の態度構造:専攻, 性と関連づけての検討. 東海大学健康科学部紀要 7, 45-52.
- 内閣府HP (2002) 障害者基本計画.  
<http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonkeikaku.html#1>
- 内閣府HP (2007) 障害者に関する世論調査.  
<http://www8.cao.go.jp/survey/h18/h18-shougai/index.html>

(2011年6月13日受付, 2011年6月17日受理)